

令和3年度

岡山高等学校

選抜1期

一般入学試験問題

国語 (45分 100点)

- ・合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- ・解答はすべて指示に従って解答欄に記入しなさい。
- ・問いに字数の指定がある場合は、句読点や記号も一字に数えて解答しなさい。

次の文章は、大学一年生の「僕（青山）」が、水墨画展覧会の表彰式終了後に、「千瑛」と会話をする場面である。「僕」は、高校生の時に両親を交通事故で亡くして以来心を閉ざし無気力に生きていたが、水墨画の大家である「湖山先生」に偶然才能を見出され、水墨画を教わることになる。「湖山先生」の孫の「千瑛」と「僕」は、展覧会大賞の湖山賞を賭けて共に修行を重ねてきた。これを読んで、①～⑥に答えなさい。

僕は千瑛の傍に立った。

千瑛は僕の絵を注意深く眺めていた。千瑛の横にしばらく立っていても、こちらには目もくれずに絵を見つめ続けている。

千瑛の絵に比べれば、数段見劣りする地味な花の構成だ。白い菊が上から下に五輪並び、余白が多く、彩色は施<sup>a</sup>されていない。華やかさに欠ける風情だった。描かれた花卉にも強い色彩を感じさせる要素はない。

「言葉もないわね……、本当に」

千瑛はそう言ったが、花卉の一つ一つ、葉の一片一葉が、僕の言葉であり想いだった。

一つの花びらにさえ、自分の心があるがままであることを信じて、限りなく花に寄り添いながら、花に教えられるように手が動いていくことを感じていた。あの夜の僕には絵は描くものではなかった。花に描かされるもの、もつと言えば、花に教えられるもの、だった。湖山先生の言ったことは正しかった。花に教えられ、手があるがままに動いているときほど、不思議なことだけれど、自分の想いが筆致に反映していた。その一筆の筆致には、光があり、光と反対の影さえも水と墨の調和の中で表現されていた。

光を帯びた無色透明な液体と、光を暈す<sup>ぼか</sup>微細極まりない物質の融け合う美を、最小の単位として、水墨画は構成されている。

それはもしかしたら、命の根源に限りなく近い姿なのかもしれない、と、出来上がった五輪の菊を眺めて思った。すべての菊を数本の茎でつないだとき、僕自身の手も、意識しないまま、まるで間違いを犯さなかったことに気が付いた。ただ花に導かれて、自然だった。それが、<sup>c</sup>どれだけ拙く見えても、うまく見えても、僕にはどうでもよかった。

湖山先生が伝えたかったのは、たぶん、こういうことなのだろう。

「花に教えを請え」

と、とても簡単に言われたけれど、その背後にあった術理や、思考や、実感は、言葉をはるかに超えていた。それはまさしく、描くことでしか説明できないものだった。

菊を描くことができた喜びは、何かを完成させることができた喜びではなかった。そうでなくて、小さな命と共に生きていて、自分もまた命の一つのなだと感じる繊細でみずみずしい瞬間だった。そこには意志はなかった。ただその経験だけがあった。

描き続けていたほんのわずかな瞬間、自分が幸福であったことに驚きながら筆を置いた。

その絵が、いま千瑛の目の前にあった。

千瑛は絵を見て、最後には微笑んだ。

「これが青山君の美なのね」

と、千瑛は独り言のように呟いた。それから大きく息を吐いて、肩の力をガクツと抜くと、諦めたように笑って見せた。僕もその朗らかなしぐさを見て笑ってしまった。千瑛は握手を求めてきた。僕がその意味が分からず躊躇っていると、千瑛は整った大きな唇を開いて、

「湖山賞は私が頂いたけれど、勝負は私の負けね」

と穏やかな声で言った。

僕はわけの分からないまま、千瑛の瞳に理由を問い返した。

「お祖父ちゃんも翠山先生も本当は、あなたに湖山賞をあげたかったのよ。なんとなくそんな気がするわ。技術では確かに、私があなたよりも上をいつていると思う。でも、水墨の本質に、命そのものに、より深くぎりぎりまで近づけたのはあなたのほうよ。この違いは、ほかの人には分からないかもしれない。でも私や湖峰先生や湖栖先生、そしてお祖父ちゃんたちには、はっきりと分かる。水墨が心を描く絵画、命を描く絵画なのだとしたら……、私の負けね」

僕は千瑛の手をゆつくりと握った。

「違うよ、千瑛さん。千瑛さんが受賞したことには、確かに意味がある。僕はこの絵を描きながら、自分に足りなかったものを感じたんだよ」

「あなたに足りないもの？」

「そう。僕は確かに自分の心を描けたかもしれない。でも、自分の生き方を描いたわけじゃない。千瑛さんの技術は、千瑛さんの美しい生き方そのものだ。水墨に専心し、ひたむきに何かを続けて追いかけてきた純粋な姿勢。そのひたむきさは、誰かの心を動かすんだと思う。僕は、千瑛さんの絵に動かされた。僕にはそのことが分かるよ」

「ありがとう、青山君」

僕はうなずいた。

「そのことを湖山先生も翠山先生も理解しているんだよ。水墨が線の芸術なのだとすれば、線とは生き方そのものでもあるから。千瑛さんはそれを描くことができたんだ。湖山賞、受賞おめでとう。僕はあなたの絵があったから、ここにいるんだよ」

千瑛はうなずいた。目に涙を浮かべていた。

真つ黒な二つの瞳がしっかりと僕を捉えていた。

僕は微笑んだ。

この三年間、ほとんど笑わなかったせいで、表情筋が運動不足だったから何処か不自然に見えたのかもしれない。千瑛は、僕が微笑んでいることに気づくと、大きく笑った。その笑顔はまるで大輪の牡丹のようだった。

僕にとつて、受賞よりもその笑みのほうがずっと価値があった。誰かといっしょに同じ時間を分かち合うことの意味を、こんなときどうやって伝えたらいいのだろうか？

「これからもよろしくね。青山君」

と千瑛は言った。優しい声だった。

僕はうなずいた。

千瑛はまたすぐに祝辞を述べに来た多くの人たちに取り囲まれてしまい、僕はそこから離れた。

僕は展覧会の会場を一人でゆっくりと回って、たくさんの水墨画を丁寧に眺めた。 **A** と言つてもいい壮麗な景色だった。それぞれの人たちが自分た

ちの想いを描き、壁を飾っていた。僕はその壁に飾られた数えきれないほどの絵を、これまで感じたことのない穏やかな気持ちで眺めていた。

僕はふいに自分がずつと思いつけなかった言葉に気が付いた。

「僕は満たされている」

と、まるで他人事ひとごとのように、言葉にした。自分自身の幸福で満たされているからじゃない。 **g** 誰かの幸福や思いが、窓から差し込む光のように僕自身の

中に映り込んでいるからこそ、僕は幸福なのだと思つた。

(出典 砥上裕将「線は、僕を描く」)

(注) 水墨画——墨の黒一色で描かれる絵画。墨の濃淡やグラデーション、筆づかい(筆致)などによって繊細な表現がなされる。

術理——技の元になる理屈や思想。

翠山先生——湖山先生に並ぶ水墨画の大家。後出の「湖峰先生」と「湖栖先生」は、「僕」と千瑛の兄弟子。

① ——の部分**a**、**d**の漢字の読みを書きなさい。

② **A**に入れることばとして最も適当なのは、**A**～**E**のうちではどれですか。一つ答えなさい。

**A** 十人十色    **B** 風光明媚    **C** 玉石混交    **D** 百花繚乱

③ 「言葉もないわね……、本当に」とあるが、この「千瑛」のことばを、このときの「僕」はどのように受けとめているか。その説明として最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア 千瑛の絵に勝るとも劣らない素晴らしい作品を目にして、感極まって自然にこぼれ出たことばだと「僕」は受けとめている。

イ 千瑛の絵に比べて華のない期待を下回る作品を目にして、落胆のあまり思わず発したことばだと「僕」は受けとめている。

ウ 千瑛の絵よりも色彩の少ない地味な作品を目にして、どう誉めるかを考えあぐねてのことばだと「僕」は受けとめている。

エ 千瑛の絵の完成度に及ばない練習不足の作品を目にして、こみ上げる怒りをこらえてのことばだと「僕」は受けとめている。

④ 「それが、どれだけ拙く……どうでもよかった」とあるが、ここでの「僕」の様子を説明した次の文の [ ] に入れるのに適当なことばを、文章中から二十五字で抜き出して書きなさい。

完成した絵の評価よりも、花に教えられるように自然に手を動かして自分の心を描ききることができ、自分は [ ] と感じられた瞬間の喜びの方がずっと尊いものだと思ひ、満ち足りた気持ちでいる。

⑤ 「湖山賞は……私の敗けね」、「千瑛さんが……意味がある」とあるが、このときの「千瑛」と「僕」について説明した次の文の [ ]、[ ]、[ ] に入れるのに適当なことばを、[ ] は文章中から十五字以内で抜き出し、[ ] は三十五字以内で書きなさい。

千瑛は、水墨画とは [ ] だと考え、それを具現化できた「僕」こそが湖山賞にふさわしいと考えているが、「僕」は、水墨画を線の芸術と捉え、千瑛の描く美しい線は、[ ] であり、そこそが人の心を打つので、やはり千瑛が受賞すべきだと考えている。

⑥ 「誰かの幸福や……幸福なのだと思う」とあるが、この部分の表現について説明したものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア この部分には隠喩法が用いられており、人々の想いを「光」と結びつけることによって、水墨画を通して出会った人たちとの関わりの中で「僕」が成長し、自分の外部の人の想いを輝かしいものとして肯定的に受けとめられるようになったことを示唆している。

イ この部分には反復法が用いられており、幸福ということばを二度繰り返すことよって、水墨画を通して出会った人たちとの関わりの中で「僕」が成長し、周囲の親しい人たちの幸福を自分自身の幸福と同様に素直に喜べるようになったことを強調している。

ウ この部分には直喩法が用いられており、人々の想いを窓から差し込む光でたとえることによって、水墨画を通して出会った人たちとの関わりの中で「僕」が成長し、自分以外の誰かの想いを受け入れて心が温かく満たされるようになったことを印象づけている。

エ この部分には対句法が用いられており、誰かの幸福と「僕」の幸福を並べて書くことによって、水墨画を通して出会った人たちとの関わりの中で「僕」が成長し、他人の幸福で心が満たされている自分を幸福だと感じるようになったことを明らかにしている。

次の文章を読んで、①～⑤に答えなさい。ただし設問の都合上、一部省略・改変した箇所がある。

清少納言は鳥が好きだったに違いない。鋭い観察が残されている。なかでもホトトギスに深い愛着を感じていたようである。

郭公は、<sup>①</sup>なほ、さらにいふべきかたなし。いつしか、したり顔にも聞えたるに、<sup>②</sup>卵の花、花橘などにやどりをして、はた隠れたるも、ねたげなる心ばへなり。五月雨のみじかき夜に寢覚をして、いかで人よりさきに聞かむと待たれて、夜深くうちいでたる声の、らうらうじう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せんかたなし。六月になりぬれば、音もせずなりぬる、すべていふもおろかなり。よる鳴くもの、なにもなにもめでたし。(四一)

(中略) ホトトギスはわずか一カ月しか人々の耳目に触れない。六月に入るとはったり鳴かなくなるのも、一通りの形容では言い尽くせないほどすばらしい。プラスの評価の文章だけに、この数行には中世の音文化についてのヒントが散りばめられている。ひとつは、鳥の鳴き声を聞くため、五月の早朝にわざわざ起き出す人がいるということである。「五月雨のころの短夜に、目をさまして、なんとかして人より先にその声を聞こうと待ち遠しく思ううちに、明け方の闇のなかに鳴いたその声の巧みさ、かわいらしさは、<sup>③</sup>魂もそちらにさまよい出るかと思われるほど気持ちが悪かれる」(現代語訳)。これは声の美しさより、夏の到来をひとあし早く感じたいという人々の願望である。(中略)

また、第四一段で彼女が示した、<sup>④</sup>音文化へのもうひとつの視点は、「夜鳴くもの、なにもなにもめでたし」という評価に現れた、音と夜とのつながりへの着目にある。ホトトギスは特に夜から明け方に鳴くから、好ましいのである。ではなぜ夜ならばよいのか。(中略)

夜といえば、私たちが平安文学において親しいのは、物怪など霊的な存在の出現である。もちろんそれは文学の世界に固有のではなく、現実の現象に文学が追従したというべきであろう。『源氏物語』においても、何度となく物怪は夜に現れ、人々の魂を抜き取ってしまう。ところで物怪の夜の出現と、音は夜にふさわしいという認識は、無関係なことではない。笹本正治が指摘するように、古代・中世の人々にとって、夜は神々や妖怪、魔物、精霊の支配する世界であって、それに人間が対応するために、音を媒介として発信してきたのである。確かに今日においても神事の多くは夜に行なわれるし、闇という視覚が奪われた状況において、音こそが神に何かを伝える最も効果的な手段となる。したがって管絃の御遊びにしても、単なる余暇の娯楽ではなく、人々と同時に神仏もまた聴いていたのだろうし、鳥の声もまた耳を楽しませるためだけの単純なものではなかった。事実、ホトトギスには、西村亭が指摘するように、冥土の鳥というイメージが付着している。

<sup>⑤</sup>しでの山を越えて来つらむ ほととぎすよ。恋しき人のうへ 語らなむ 『拾遺集』

「しで」とは「死出」あるいは「死天」であり、冥界の山から飛んできたホトトギスに、亡くなった人の様子を聞きたいと願っているのである。ホトトギスへのこのような意味づけは、それが夜に鳴くということと深い関係がある。

(出典 中川真「平安京音の宇宙」)

(注) 笹本正治——歴史学者。

管絃の御遊び——音楽を演奏すること。

西村亨——国文学・民俗学者。

① 「なほ、さらにいふべきかたなし」の読みを、現代かなづかいを用いてひらがなで書きなさい。

② 「聞かむ」の意味を、文章中の現代語訳から抜き出して書きなさい。

③ 「魂も……惹かれる」に当たることばを、古文(本文2行目「郭公は、」～5行目「めでたし。」)の中から五字で抜き出して書きなさい。

④ 「音文化へのもうひとつの視点」とあるが、筆者の考える「音文化」の説明として最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

ア 鳴く鳥の声で夏の到来をいち早く感じたいという文化と、夜の音によって霊的な世界と交信できると考える文化。

イ 鳴く鳥の声で朝は早く起き出しておくという文化と、夜の音によって物怪が出現してくると考える文化。

ウ 鳴く鳥の声で初夏の終了を知るとい文化と、音は夜のものこそ神聖で畏れ多いものだ<sup>おそ</sup>と考える文化。

エ 鳴く鳥の声で季節の変化を一足先に感じるという文化と、音は夜のものこそ全てを伝えてくれるものだ<sup>おそ</sup>と考える文化。

⑤ 「しでの山……」の歌について説明した次の文の I ～ III に入れるのに適当なことばを、I は四字、II は二字で、それぞれ文

章中から抜き出して書き、III は文章中の語を使い一語の形容詞にして二字で書きなさい。

ホトトギスは、I ことから、冥界とII する手段となる鳥と考えられたため、この歌のように、恋しき人、つまり今はIII 人の様子をホトトギスに語ってほしいと願う発想も生まれた。

次の文章は、経済学者の堂目卓生どうめたくおが書いた文章である。これを読んで、①～⑥に答えなさい。

経済は英語で *economy* (エコノミー) といいますね。「エコ」は、エコロジーのエコと同じで生活する場所を、「ノミー」はギリシャ語のノモスを源とする言葉で、法を意味します。

どんな生活圏でも資源は限られています。これをどのように分かちあえば共同体がより安全で快適になるか。そのルールがエコノミーで、日本語では、中国語の経世と済民という言葉をもとに「経済」と言われaれます。済民とは貧困の中にいる民を救うこと、経世は、世の中を整えることです。

しかし、この経済という言葉は誤解されっぱなしで、現代では経済成長、経済効率など、物質的な豊かさを増すことのように受け取られています。経済学の祖 アダム・スミスの「国富論」(1776年)が偏った解釈をされてきたことも誤解に輪をかけました。

みなさん、聞いたことがあるでしょう。富を分かちあう気のない人が、利己的に活動しても、その方がかえって全体の富を増大させる、それがスミスという「見えざる手」だと。

これも、ある意味、誤解です。スミスは最初の著作「道徳感情論」(1759年)で、人が野放図のほうずに富の獲得を目指せば社会の秩序は乱れると論じます。そして富への欲望だけでなく、人間にあるもう一つの本性を使おう、その能力を使えば富を得ながらも富に囚とらわれず、心の平静を保つことができる、と書いています。

それが「共感」、シンパシーです。誰でも人が泣いていたら悲しいし、喜んでいたら一緒に笑いたくなる。こうした共感cは、ソントク勘定とは別の能力で、人間に自然と備わっている。家族だったら自分だけ食べて、他の人に食べさせないということはしませんね。当然、分けあいます。他人でも目の前に飢えている人がいれば、自分が相手の立場だったらどんな気持ちになるか想像し、利他的な行動をすることもある。こうした共感によって自分の行動を制御することができれば、それぞれが自由な経済活動をして、おのずから最低限の富が全体に行き渡る——これが「見えざる手」によってスミスがイメージしていたことだった、と私は考えています。

スミスが、自分や自国だけが儲もればよい、と考えていなかったことは、彼が重商主義と呼ばれる当時の保護貿易政策を徹底批判していたことから明らかです。「交換」を重視したスミスは言語も文化も違う外国を、友好を取り結ぶべき交換相手と考え、資源を奪い合う敵とは考えていませんでした。「交換」とは、「私が必要とするものをください、かわりにあなたが必要とするものをあげます」というもので、双方の共感にもとづく行為と考えたのです。ですから、植民地をめぐる争い、多くの命と莫大な資源を軍事に費やす英仏間の戦争は、「政府による浪費」であり、経世にも済民にもならないと批判したのです。

では、なぜ、スミスは誤解されたのでしょうか。それは蒸気機関の時代に生きたスミスの予想をはるかに超えたスピードと規模で科学技術が発達し、富と人口が爆発的に増え、物が豊かになり、消費が増えれば幸せになるという世界観が誕生したことにあります。

富や地位への野心は、勤勉、創意工夫などを通じて繁栄に貢献しました。一方で、物の豊かさに目を奪われ、目に見えない文化や習慣、伝統などは軽ん



じられました。そして、歯止めのかからない野心、利己心から、今や富は偏在し、少数の富裕層が世界の資産の大半を握り、貧しい人は置き去りにされています。その結果、他人を顧みない富の追求が経済だと誤解されるようになったのです。

こうした経済の学祖とされているのをスミスが知ったら、さぞかし不本意でしょう。同時に米中貿易紛争に見られるような保護主義的な介入を見たら、<sup>d</sup>約250年前の重商主義時代となら変わっていない、と嘆くでしょう。

今日、成長の限界がいたるところで明らかになっています。1人当たりの生活水準、消費量が増えることによって二酸化炭素の排出量の増加に伴う地球温暖化や、資源の乱獲、水不足、人口爆発、格差の拡大など、先送りできない問題が、目の前に山積みになっています。人口減少と高齢化にさらされる日本では、家庭や地域といった社会を支えるセーフティネットの<sup>e</sup>ホウカイが叫ばれています。

日本を含む世界を大きな船にたとえたら、今その船底には多くの穴が開いていて、穴から水が入ってきています。なすべきことは、上層階の1等船室に逃げ込むことではなく、船底に行つて穴をふさぐことです。

細分化され、内向きになった学問のままでは、現代の諸課題には対応できません。<sup>f</sup>穴をふさぐために大事なことはエコノミーの原点に立ち返り、様々な問題を、分かちあいの精神で考えることです。

(注) 野放図に——身勝手に。

重商主義——他国からの輸入を最小限に抑える一方で輸出を増大させて、自分の国に富が蓄積できるようにする自国保護主義の経済政策。

(出典 堂目卓生 令和二年一月二十六日付「<sup>よみうり</sup>読賣新聞」)

① ——の部分<sup>c</sup>、<sup>e</sup>を漢字に直して楷書<sup>かいしょ</sup>で書きなさい。

② 「<sup>a</sup>れ」の品詞について説明した次の文の I、II にそれぞれ入ることばの組み合わせとして最も適当なのは、**ア**～**エ**のうちではどれですか。一つ答えなさい。

「**れ**」は I 活用動詞の未然形に付いて、II の意味を表す助動詞である。

**ア** I 五段 II 受け身    **イ** I 五段 II 可能    **ウ** I 上二段 II 受け身    **エ** I 上二段 II 可能

③ 「アダム・スミスの………解釈をされてきた」とあるが、これについて筆者の考えをもとに整理した次の表の **A**、**B** に入れるのに適当なこ  
とばを、それぞれ三字以内で文章中から抜き出して書きなさい。

【アダム・スミスの「見えざる手」について】

一般的な解釈	己の欲望にもとづく <b>A</b> な行動 ↓ (自由な経済活動) ↓ 全体の富が増大する
筆者の解釈	<b>B</b> にもとづく抑制的な行動 ↓ (自由な経済活動) ↓ 全体に最低限の富が行き渡る

④ 「約250年前の………嘆くでしょう」とあるが、筆者がこのように考える根拠を説明したものととして最も適当なのは、**A**、**B**のうちではどれですか。  
一つ答えなさい。

- ア アダム・スミスが、自国の利益だけを考えた経済活動を長期間続けていると世界全体の富が減少してしまうことに危機感を示していたこと。
- イ アダム・スミスが、必要なものを何でも貿易相手国と交換できるようになると勤勉や創意工夫の意義が失われるという心配をしていたこと。
- ウ アダム・スミスが、文化や習慣の違う国にこそ富の源泉が眠っていると想像して他国とは友好であるべきだという考えを支持していたこと。
- エ アダム・スミスが、必要なものを交換してくれる貿易相手国との友好関係を重視して自国の利益のみを追求することに反対していたこと。

⑤ 「穴をふさぐために………考えることです」とあるが、これがどういふことかを説明した次の文の **X**、**Y** に入れるのに適当なことを、  
**X** は文章中から十一字で抜き出して書き、**Y** は四十字以内で書きなさい。

**Y** 物質的な豊かさを幸せの基準として消費を増やし、**X** を続けた結果引き起こされた現代の諸課題に対応するには、「エコノミー」とは本来  
であることを自覚し、それにもとづいて考えることが大切だということ。

⑥ この文章の構成と内容の特徴について説明したものととして最も適当なのは、**A**、**B**のうちではどれですか。一つ答えなさい。  
**A** 冒頭でまずキーワードの定義を示すことにより、日本語の「経済」の意味と対比しやすくして、西洋と日本の考え方の違いに気づかせようとしてい  
る。  
**イ** アダム・スミスの著作を引用して正しい記述内容を紹介した上で、経済について論じるためには原典に当たることが重要だと、根拠をもって主張し  
ている。

ウ 中盤で問題提起をしてその答えを述べていく形をとることにより、科学技術の発達とともに人々の価値観が大きく変化したことへと、論を展開している。

エ 「大きな船」という比喻を用いて状況を想像しやすくした上で、現代の諸問題は全世界を巻き込む深刻なものであり、安全な場所はないと結論づけている。

※問題は次のページに続きます。

4

①～④に答えなさい。  
 四人の中学生が、敬語に関する授業を受けた後に、【資料Ⅰ】～【資料Ⅲ】を見ながら会話をしている。次の【四人の中学生の会話】を読んで、

【四人の中学生の会話】

幸太 今日授業で敬語について学習したけど、敬語を正しく使うのはやっぱり難しいね。実は昨日も、

職員室に行ったときに、「私の母が教頭先生にお会いになりたいそうです」って伝えたら、敬語の使い方について注意されてしまったんだ。

麻里 なるほど、その場合、X だったね。授業でも、間違いやすいところだと先生が強調されていたよね。

春香 幸太さんの言う通り、敬語を適切に使うのは難しいよね。私も先週、部活動の練習中に、先輩に失礼な

言い方をしてしまったことがあったよ。先輩は何も言わなかったけど、ちよつと気まずかったな。

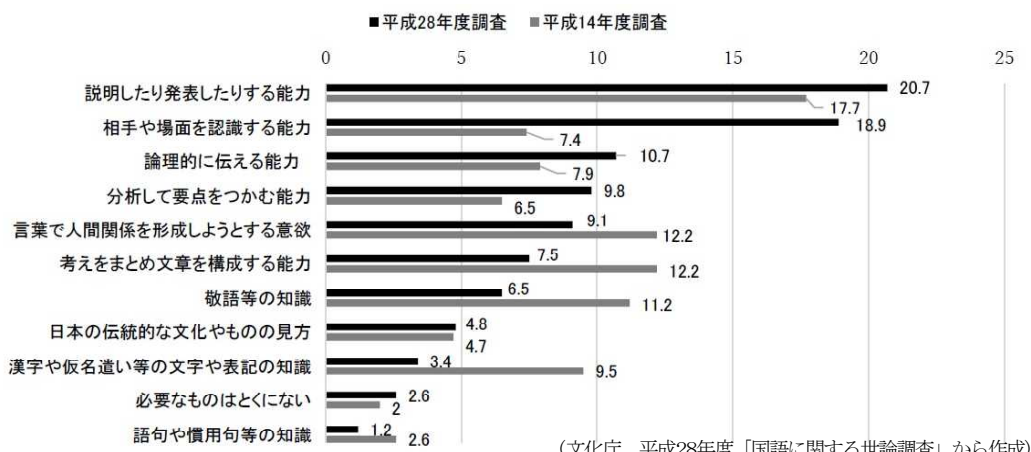
高志 麻里さんは自然に敬語表現が使えていて素敵だね。これから高校生になって部活動や委員会先輩たちと話すんだから、敬語をもっと正しく使えるように練習しないと。

幸太 僕はそこまでして敬語を正しく使うべきだとは思わないな。中学の部活動では先輩後輩の間で敬語を使っていなかったけど、逆に仲が良い感じがしてよかったと思う。それに、先日の総合的な学習の時間に紹介してもらった【資料Ⅰ】によると、『これからの時代、特に必要だと思う言葉に関する知識や能力』について、Y からね。調査から四年も経過しているし、敬語が使えなくても、対話の状況や相手について把握できればいいという傾向は強くなっているはずだよ。

麻里 私はそうは思わないよ。たしかに幸太さんの言う通りの結果になっているけれど、この調査は最も必要だと思うものを一つだけ選ぶ形式だよ。ということ、幸太さんの指摘も見方を変えようと、敬語を軽視しているというよりは、別の能力を重視する人が多くなってきたと解釈することもできるよ。それに、【資料Ⅱ】や【資料Ⅲ】を見てみると、Z と考えることができるんじゃないかな。

いかな。

【資料Ⅰ】 これからの時代、特に必要だと思う言葉に関わる知識や能力(%)



① 麻里さんの発言の **X** に次に示す一文を入れる場合、**I** に当てはまる言葉として最も適当なのは、**A**、**ウ**のうちではどれですか。一つ答えなさい。

また、**II** に当てはまる表現を考えて書きなさい。

「お会いになりたい」では **I** 語になってしまいうから、ここでは **II** と言うべき

**A** 尊敬 **I** 謙譲 **ウ** 丁寧

② 幸太さんの発言の **Y** に入れるのに最も適当なのは、**A**、**エ**のうちではどれですか。一つ答えなさい。

**A** 「敬語等の知識」は十四年の間におよそ半分まで割合が減少してしまっているけど、「日本の伝統的な文化やものの見方」が必要だと思っている人の割合は変わっていない

**I** 「敬語等の知識」が平成14年の調査では上位五つに入るほど必要だと思われるけど、平成28年度の調査では約5ポイントも減少し、代わりに「相手や場面を認識する能力」が約12ポイントも増えている

**ウ** 「敬語等の知識」は平成28年度の調査では6.5%しかなく、20.7%を占める「説明したり発表したりする能力」の方が、これからの時代には特に必要とされていると考えることができる

**E** 「敬語等の知識」が平成28年度の調査で約5ポイントも増加していて、今後必要となる能力だと考えている人も多いようだけど、「説明したり発表したりする能力」の方が必要だと感じている人がさらに多い

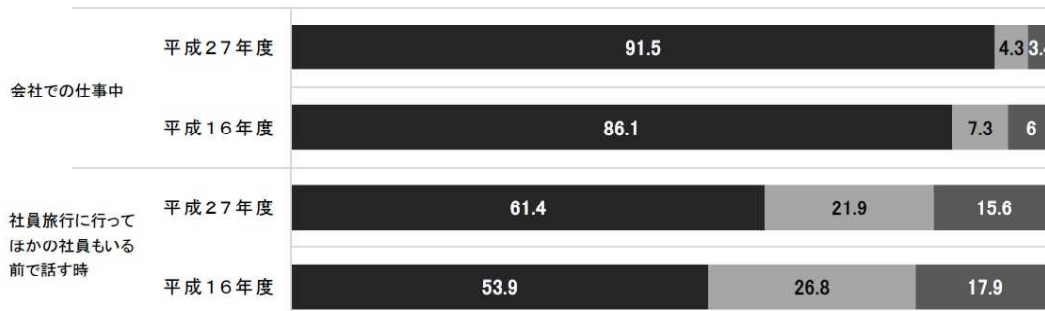
【資料Ⅱ】 中高生が先生に敬語を使うべき場面

■敬語を使って話すべき ■話題による ■敬語を使って話す必要はない



【資料Ⅲ】 上司に対して敬語を使うべき場面

■敬語を使って話すべき ■話題による ■敬語を使って話す必要はない



(文化庁 平成27年度「国語に関する世論調査」から作成)

- ③ 文章中の四人の発言における特徴について説明したものと最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。
- ア 春香は他者の意見に同意しつつも、自らの体験談を用いて新たな論点を加えようとしている。
- イ 高志は対立する二者の間に立ち、中立的な視点で感想を述べることで場を収めようとしている。
- ウ 幸太は他者の意見に反論する際に、具体的な根拠を示しながら自らの考えを主張している。
- エ 麻里は意見が異なる相手に対し、資料の不備を指摘することで言い分をすべて否定している。

- ④ 麻里さんの発言の **Z** に入れるのに適当な内容を、条件に従って六十字以上、八十字以内で書きなさい。

- 条件
- 1 二文に分けて書き、一文目に、【資料Ⅱ】と【資料Ⅲ】からわかることを書くこと。
- 2 二文目に、敬語の使用についての麻里さんの主張を、「だから」に続けて書くこと。

※資料の数値は使わなくてもよいが、数値を使う場合は左の例を参考にして表記すること。

(例)

35.0
-----
%